

ヴィヴァルディ

VIVALDI

「四季」作品8

THE FOUR SEASONS, Op.8

●第1面

第1番「春」 No.1:SPRING——(10:54)
(Allegro—Largo—Allegro)

第2番「夏」 No.2:SUMMER——(10:59)
(Allegro non molto—Adagio—Presto)

●第2面

第3番「秋」 No.3:AUTUMN——(12:10)
(Allegro—Adagio molto—Allegro)

第4番「冬」 No.4:WINTER——(9:45)
(Allegro non molto—Largo—Allegro)

カール・ミュンヒンガー指揮

KARL MÜNCHINGER conducting the

シュトゥットガルト室内管弦楽団

STUTTGA RT CHAMBER ORCHESTRA

ウェルナー・クロツィンガー (独奏ヴァイオリン)

WERNER KRÖTZINGER (Solo violin)

Original recording by The Decca Record Co., Ltd.
Manufactured under license of London Records K.K.

DAMPC

STEREO DOR-0172



●制作にあたって

日頃は第一家庭電器をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。

DAMのクラシック・レコード・シリーズは、昭和51年11月の「アルプス交響曲—ケンペ指揮ドレスデン国立管弦楽団」(DOR-0026・27)以来、平成2年春の、VIPスーパー・アナログ・ディスク「ブリテンの戦争レクイエム」(DOR-0169-70)迄、37タイトルを発表させていただきました。

そのレパートリーの中で、「協奏曲」が少ないことは前回触れましたが、全く無かったのがバロック音楽です。バロックといえば、なんといってもヴィヴァルディの「四季」が有名ですが、英EMI原盤には演奏、録音の両面から見た「四季の決定盤」が無く、取り上げるのを見送ってまいりました。

前回から登場の英デッカ(ロンドン)レーベルには、幸い、ミュンヒンガー盤(3種)、マリナー盤、ホグウッド盤等、名盤が揃っています。その中で、マリナー盤は、昨年10月のキングのザ・スーパー・アナログ・ディスクの第6回として、ミュンヒンガーの1972年録音盤は、本年2月の、ポリドール・ロンドン・ファイナル・LPシリーズで、それぞれ発売されています。

ところで、「四季」といえば、まず、イ・ムジチの演奏のものが大変有名ですが、実は「四季」のブームを作ったのは、このミュンヒン

ガーの1951年録音盤なのです。その後、ファザノ〜ローマ合奏団盤、イ・ムジチ盤などにより、「四季」はクラシックの最人気曲となっているのは、皆様ご存知の通りです。

1945年、30歳のミュンヒンガーは、故郷にバロック音楽を中心に演奏する、シュトゥットガルト室内管弦楽団を創立し、その後、ヴィヴァルディ、バッハ、モーツァルトの権威として、ロンドン・レーベルに数々の名盤を残しましたが、大変残念なことに、去る3月13日、74歳で亡くなり、本盤は、はからずも、追悼盤となってしまいました。

ミュンヒンガーはシュトゥットガルト室内管弦楽団とともに、「四季」の録音を英デッカに3種残しています。

- ①1951年モノラル録音 Vnソロ バルビエツ
- ②1958年ステレオ録音 // クロツィンガー
- ③1972年 // // クルカ

本アルバムは、②の1958年録音のもので、翌1959年2月、ロンドン・ステレオの第1回のその第1号(SLB-1)としてキングレコードより国内発売されました。勿論、日本での「四季」の最初のステレオ・レコードでもありました。

ミュンヒンガーの演奏は、厳格なリズムと一糸乱れぬアンサンブルで、正にドイツ風という表現がぴったりですが、又、それでいて清新で生き生きとしている点が魅力かと思えます。クロツィンガーの独奏ヴァイオリンも大変、瑞々しく爽やかです。イ・ムジチの柔

かで、テンポの速い、流れるような演奏とは、まことに対照的といえるでしょう。

録音については、過去のDAMシリーズの中でも、ステレオとして最も古いものですが、32年も前のステレオ初期の録音とは信じがたい、さすが「ステレオのロンドン」に恥ない素晴らしさです。*ff*の時、高弦がやや硬質になることや、テープ・ヒス等の問題を除けば、ナチュラルなプレゼンスと、鮮明な音で、③の1972年録音と比べても、優るとも劣らない優秀録音かと思えます。

ところで、DAMスーパー・アナログ・ディスクは、昭和52年6月の「青少年のための管弦楽入門」で、マスター・プレス、翌昭和53年11月の「サマータイム」で厚手プレスと、東芝EMI株のご協力を得て、盤質改善を続けてまいりましたが、平成元年3月の「フルトヴェングラーの第九」をもって、東芝EMI自社工場でのアナログ・ディスクの生産が終了となりました。その後は、キングレコード株のご協力により、カッティングは、キングレコード株、メッキとプレス等は日本ビクター株という方法で、厚手プレス(180g)スーパー・アナログ・ディスクを会員の皆様にお届けして来たのですが、国内主要レコード・メーカーで、唯一、高品質アナログ・ディスクの製造を継続していた日本ビクター株が、この夏までで、遂にスーパー・アナログ・ディスクの製造を中止する意向のようで、誠に

残念ながら、今後、国内における、厚手プレスはもとより、高品質のアナログ・ディスクの製造は断念せざるを得ない状況に至りました。

(その前後の事情は、月刊・文芸春秋3月号の直原清夫氏の記事等で、この事態をある程度、予測していらっしゃった方もいらっしゃるかも知れません……)

このような情勢の中での本アルバム制作にあたり、高和元彦プロデューサー、牧野晃マスタリング・エンジニア、キングレコード株、日本ビクター株、並びに関係各位には、更にも増して多大なご協力をいただいたことを、心より厚くお礼申し上げます。

一方、デジタル録音については、最近になってフィリップスが、周波数特性上、20kHz以上が必要であることを公式に表明し、それに対応した新レコーディング・システムにより録音され、22kHzまで収めたCDをこの2月に発売、又、CBSソニーも、録音段階で、特製の20ビット機(従来は16ビット、サンプリング周波数は従来のままらしい)を採用し、その1号CDが3月に発売されています。

過去、DAMがデジタル録音及CDの規格の不充分さを指摘してきましたが、アナログ・ディスクの国内製造が終焉しようとしている今になって、ようやく、CD推進の2大メーカーが、その改善にむけて動き出したことは、大変、皮肉なことと感じます。

ただし、デジタル録音が、アナログ録音を越えるのは、まだ先のことでしょうし、CDについては、その規格がバージョン・アップされない限り、スーパー・アナログを、音の全ての点で越えるのは、難しいでしょう。

現在、最高水準の音を追求すると、アナログ・ディスク(ただし、優秀録音を、丁寧にディスク化したものという条件付)に、戻ってしまうというのは、経験豊かなファンの声であり、又、DAMがソフト制作から得た体験でもあります。

今後、アナログ・ディスクの制作は、極めて困難が予想されますが、次回、11月には、DAM第2弾ヨーロッパ録音(最新アナログ録音)を、ヨーロッパ・プレスのアナログ・ディスクでお届けするべく、準備中ですので、会員の皆様の一層のご支援のほど、お願い申し上げます。

※春のVIPレコード「戦争レクイエム」は、予想を越えるご要望をいただき、在庫も極く少なくなりました。まだ入手されていない方は、この第33回の頒布会の企画で若干数を用意いたしましたので、是非、この最後のチャンスをお見逃しなきよう、お願い申し上げます。

アントニオ・ヴィヴァルディ(1675~1741)の“四季”は春夏秋冬を歌った四つのソネットによってできている。各季節は急一緩一急の一般的な形式の3楽章から成るヴァイオリン協奏曲である。ヴィヴァルディは彼の客観的な楽章(第2と第3楽章)にロンド形式を、緩徐楽章は歌うように美しい旋律で比較的自由に、標題にあまりとらわれずに書いている。

(第1面)

春： ホ長調のヴァイオリン協奏曲。第1楽章は、春の到来を喜ぶような明るい主旋律を五つの対句をはさんで6度もくり返すロンド形式でかかっている。第1の対句は小鳥の歌、第2は春のそよ風の快いささやき、そして3番目で空気は一変して重く暗く、雷がなり、いなずまがひらめく。しかしそのあらしも長くは続かず、これはふたたび第2楽章の“夏”に現われる。独奏ヴァイオリンがひく4度目の陽気な主旋律を経てハ短調の鳥の声の美しい対句に入る。5度目に春の旋律が現われるが、この時には後半しか演奏されない。そして5番目の対句では独奏ヴァイオリンが活躍する。ふたたび主旋律が主調で奏され楽章を終る。

緩徐楽章(第2楽章)は忠実な羊飼犬をかたわらに、眠る牧人をえがく。ハーブシコードとチェロは沈黙をまもり、その代りにヴィオラが単純な、しかし大へんな切分音のフィギュアで低音をひき、聞く者の心をしずめる。これらの上を独奏ヴァイオリンはハ短調で美しい旋律を歌う。

第3楽章は $\frac{3}{4}$ 拍子、アレグロの原調(ホ長調)で演奏される春の日射しに踊るニンフやシェパードの田園舞曲である。独奏ヴァイオリンが盛んに活躍する。

夏： ハ短調のヴァイオリン協奏曲。第1楽章は正確にはロンド形式とは言えないかもしれない。と言うのは作曲者ヴィヴァルディはあまりに多くのものを入れようとしたために夏の主旋律を3度しか登場させていない。しかもコードにもこの主旋律を使っていない。夏の主旋律は、照りつける夏の日射しにあえぐ人々のけだるさをえがき、第1の対句ではカッコーの声がきかれる。第2の対句は盛りだくさんな内容を持っている、そよ風を思わせる高音弦楽器の中に独奏ヴァイオリンがかなでるきじ鳩の声がはっきりと浮かびあがり、つづいて荒々しいトゥッティーでハ短調の北風が吹きまわる。第3の対句では低弦の色彩的な旋律は作物が荒らされるのを心配する農夫をえがく。

ふたたび北風が吹き始め、はでな威かくするようなハ短調で楽章を終る。

緩徐楽章はヴィヴァルディの偉大なる実験の一つと言える。形式にとらわれないこの楽

章は、体を休める農夫を表わす、歌うようなメロディーが次からつぎへと現われる。しかしこれは不吉な雷雨のようなコードをともっている。この楽章では平和があらしに打ち勝つことはないが、その点をのぞけばあのベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番を思わせる。この協奏曲でピアノがあれようとする弦楽器をなだめるように、ここでは独奏ヴァイオリンがその役をはたす。

最終楽章は“はやく激烈に”と指示されており、ここで風が吹きすさび、刈り入れ前に麦や作物は荒らされてしまう。

秋： ベートーヴェンの田園交響曲の第3楽章“いななかの人々の楽しい集い”と同じへ長調である。第1楽章は単純ないななか風な旋律を中心にロンド形式で書かれている。第1の対句では酔い騒ぐ農夫を、第2の対句は大した意味もないのだが第3対句では眠りに落ちた農夫をえがく。第1楽章はいななか風なへ長調の主旋律で終る。

緩徐楽章は前後不覚に酔った農夫をえがいてはいるが、ハーブシコードのアルペッジョが弱音器をつけたあまりにも美しいこの楽章は、ヴィヴァルディが主題(酔った農夫)を忘れたのではないかと思われる。この楽章はハ短調で始まり、属和音(イ長調)で終るが、完全終止ではない。

第3楽章はふたたびハ調で始まり6つの対句からできていて“狩り”と名付けられている。

冬： すばらしいが、いささかおどけた感じのハ短調のヴァイオリン協奏曲。奔放なこの楽章の形式は名付けようがない。これに似たものと言えはハルト・シュトラウスに少しあるだけである。低音のフィギュアが入ってくる6小節目までハ短調のコードはきかれず、ただ弦が小刻みに寒さにふるえる音のみが聞かれる。つづいて独奏者はハ短調のアルペッジョで容赦なく風を吹かせる。二手に分かれたバスと弦のマルテラートは暖を取るために足ぶみをつづける。後に独奏ヴァイオリンがダブル・ストッピングで寒さにカタカタ歯を鳴らし出す。

緩徐楽章は流れるような弦楽器の伴奏に乗ってひかれる独奏ヴァイオリンの歌うようなメロディーで始まる。外では雨が降り何百人の不幸な人々が打ちのめされているのに詩人は火のそばでゆっくり休んでいる。反キリスト教的なこの内容も、この楽章をいささかもそこねていない。

第3楽章は、第1楽章と同じようにはなはだ叙述的である。ソロ・ヴァイオリンは氷の上を散歩し始める。ゆっくりとすべらないように注意しながら。しかし注意はしてもすべる、1回目はゆっくりと静かに、つづいて6回も続けて、そしてついにオクターヴとユニ

ゾーンのトゥッティーでハ短調の最後の終止による2オクターヴにわたる下降で転倒を表わす。しばらくソロのバッセージがつづくがついに氷が割れる。そこへ南風が吹き、ちょっと夏を思い出させるような夏の第1楽章の主旋律を少し聞かせるがこれも長くはつづかない。風がふたたび吹きすさびこの印象的な作品を終る。

(英デッカ解説より)

§カール・ミュンヒンガーと

シュトゥットガルト室内管弦楽団

ミュンヒンガーは1915年5月29日南ドイツのシュトゥットガルトに生まれた。指揮法や理論を名高いヘルマン・アーベントロート教授について学び、1937年修業後、2年間ドイツのハノーヴァー交響楽団の指揮者に就任した。ここで彼はバッハ、ベートーヴェン、ブラームスの作品の演奏にすぐれた手腕を示し、急速に注目されることとなった。

1945年、彼が数年来懸案としていた室内管弦楽団結成のためにドイツ、オーストリア、スイス、フランスの優秀な演奏家を厳選して、彼の故郷において“シュトゥットガルト室内管弦楽団”を組織した。

ミュンヒンガーは最も完成されたアンサンブルを作るために約6ヵ月にわたってリハーサルを行った後、演奏旅行を開始した。最初の年には124回演奏会を開いたが、ドイツにおける最高の室内管弦楽団として知られるようになった。

1948年~49年にはパリとスイスへ楽旅し、同地の新聞は彼らに熱狂的賛辞を送った。

この時イギリス・デッカ(ロンドン)と契約、第1回の録音はジュネーヴで行われたが、彼らの吹込んだバッハのブランデンブルク協奏曲全6曲は後に1951年度フランス・ディスク大賞(d'Academie Charles Cros)を獲得している。

同49年11月パリで2回コンサートを開き、翌50年にはスペインを訪れたが、同地の評論家たちは「ここ数年来の最大の出来事」と評した。1950年3月ミュンヒンガーたちは三たびパリを訪問したが、そのさい彼の管弦楽団は650回演奏記念を祝っている。

1951年にはイタリア各地を旅行、ローマでは法王の前で演奏する光栄に浴した。ついでスペインを再訪問している。

1952年、スイスのルツェルン音楽祭、オーストリアのザルツブルク音楽祭、英国のエディンバラ音楽祭からつぎつぎに招かれ、卓越した演奏をもって聴衆を魅了した。

1954年2月からは全員約8週間にわたって北米およびカナダに演奏旅行し、ニューヨーク、フィラデルフィア、シカゴ等の主要都市で批評家と聴衆に大きな感銘を与えた。ミュンヒンガーはさらにサンフランシスコ交響楽

団に招かれて指揮し、引続いて南米各地を巡演している。またこの年には彼はバリ音楽院とスイス・ロマン管弦楽団の客演指揮も行っている。

1955年、同管弦楽団創立10周年にあたって文部大臣よりドイツ連邦共和国大十字勲章を授与された。

同年9月シュトゥットガルトにおいて結成10周年を祝う大音楽祭が開かれ、独奏者としてウィルヘルム・ケンプが参加した。10月にはブルッセルを中心にベルギー各地を楽旅、ついで11月にロンドンとイギリス主要都市、12月から56年1月にかけてはドイツ諸都市を歴訪、2月にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーを率いて録音、すぐにパリにおもむいて同管弦楽団による特別演奏会を行った。2月末にはシュトゥットガルト室内管弦楽団とともにミラノ、チューリン(イタリア)、チューリッヒ、ジュネーヴ(スイス)へ行っている。3月6日初めて日本を訪れ4月まで滞在、4月末から5月にかけては北アフリカ、フランスへ巡演、パリでは3回コンサートを開く。

それ以降の同楽団の演奏活動の主なものとしては、65年のヴェルサイユ宮殿でのコンサート、南仏マントンの音楽祭への参加、70年から翌年にかけてのアテネ、スペイン、ポルトガルへの楽旅などがある。さらに1966年、ミュンヒンガーは45人編成によるシュトゥットガルト古典フィルハーモニー管弦楽団を創立し、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトの交響曲作品にまでそのレパートリーを広げることには意欲を示した。

シュトゥットガルト室内管弦楽団とは、その後も1972、76、82年にも日本を訪れている。

本アルバムが録音されたとき、この室内管弦楽団はウェルナー・クロツィンガー(1926年9月生)が楽長となっているが、第1ヴァイオリン4、第2ヴァイオリン4、ヴィオラ3、チェロ3、コントラバス1の総員15名よりなっている。演奏されるレパートリーはかなり広く、バッハ、ヘンデルの古典からヒンデミット、オネガー、ルーセル、ブリテン、バーバー、ストラヴィンスキーなどの近代、現代曲にまでわたっている。

1990年3月13日、シュトゥットガルトの自宅において病歿、74歳だった。

ミュンヒンガーの「四季」が登場

第一家庭電器株の伝統あるDAMスーパー・アナログ・ディスクのシリーズに、昨年(1989年)の6月から、私どもの同種のアルバムをすでに4タイトル参加させていただいております。

今回は新たにロンドン不朽の名盤であるミュンヒンガーの「四季」が選ばれましたことは喜びにたえません。

思い起せば、ミュンヒンガーとシュトゥットガルト室内管弦楽団が、ヴィヴァルディの「四季」を最初にモノラルLPとして録音したのは1951年でした。(米国でLPが登場したのは1950年春。)ヴァイオリン独奏はラインホルト・バルヘットが受け持っていましたが、このアルバムは初め輸入盤として1952年ごろにはわが国にも少量がはいておりました。当時学生だった私は知人の家ではじめてこの曲を聞きましたが、LPレコードそのものがまだ目新しかった上に、その作品の魅力と、*ffrr*というロンドンのすぐれた録音に触れたときのショックは、今なお新鮮によみがえってきます。

日本プレスとしてこのLPが発売されたのは1958年(昭和33年)6月で、番号はLB-13

でした。何の因果か、その編成を担当したのはキングレコードの社員となっていた私でした。そのころのベスト・セラーの一つとなったことは言うまでもありません。

それ以前にも「四季」はSPレコードとしていくつかあったようですが、この曲がわが国をはじめ、欧米でにわか愛聴されるようになったのは、やはりミュンヒンガーのこのモノラルLPの出現が大きく貢献したことは間違いないところでしょう。

間もなくステレオ録音が登場し、ミュンヒンガーは直ちに「四季」を再録音しました。1958年5月にスイスのジュネーヴにあるヴィクトリア・ホールで収録され、わが国では1959年の2月28日にSLB-1という番号で発売しました。この番号からもおわかりのように、当社のロンドン・ステレオ盤の第1号だったのです。しかも前述のモノラル盤からわずか約9ヵ月後の発売で、ヴァイオリン独奏は、ウェルナー・クロツィンガーに変わりました。

その記念すべきロンドン・レコードが、今回のDAMスーパー・アナログ・ディスクとなったのは意義深いことと思います。

クロツィンガーは当時のシュトゥットガル

ト室内管弦楽団のコンサート・マスターであり、前回のバルヘットに優るとも劣らない流麗なソロを聞かせております。注目したいことは、このソロのステレオ音場での定位(位置)がやや左寄りにあるところです。これは実際の演奏会での第1ヴァイオリンのトップの位置で弾いていることを意味しております。最近の「四季」の録音では、ソロ・ヴァイオリンは中央に定位しているものが多いようですが……。

収録は1958年ですが、アンセルメの録音会場としてよく知られるヴィクトリア・ホールのバランスにすぐれた音響特性と、私どもの「スーパー・アナログ・ディスク」の技術によって、過去に聴かれなかったリフレッシュしたピュア・アナログの音でお楽しみいただけます。

ミュンヒンガーの「四季」は、イタリアの作曲家ヴィヴァルディの作品としては、ある意味でドイツ的な演奏といえますが、その後イタリアの合奏団のレコードが出るまでは、これが「四季」の典型的演奏とさえ思われていたと言えましょう。

しかし、「バロック時代の音楽に国境はな

い」とある作曲家がいつているように、今ではドイツ、イタリア、イギリス、フランスなどの楽団が、それぞれ個性ある解釈と演奏によるレコードが数多くあることはご存知の通りです。したがって、ヴィヴァルディだからイタリアの演奏団体のものが標準的だと考えるのは適切ではないと思います。

先に申し上げましたミュンヒンガーの最初のLPを聴かれたときに、荒谷正雄氏(現・指揮者)は、当時の「LP事典」(鱒書房、昭和28年5月刊)の中で次のように書いておられますので、その一部を掲載させていただきます。

「聴く者をして呆然たらしめる驚嘆の一枚である。ミュンヒンガーの指揮するシュトゥットガルト室内管弦楽団は、弦楽器合奏のもつ魔力といおうか、その限界を越えた美的世界を表現している。永年弦楽器を扱い、多くの演奏に接して来た私も、これほどまでの美しさに接したことはなかった。」

キングレコード・プロデューサー／

高和元彦(1990.7)

●カッティング・データ

Cutting Date: March 19, 1990

King Records, Tokyo

Tape Recorder: Neumann M-15A

Head Amplifier: All Tube

Drive Amplifier: All Tube-Parallel

Pushpull (Special Custom Made)

Cutting Lathe: Neumann

Cutting Head: Neumann SX-74

Non Limiter, Non Equalizer,

Non Pass Filter

制作協力: 株式会社サンデューツ

企画・制作 第一家庭電器株式会社 **DAMPC**

製造: キングレコード株式会社

THE SUPER ANALOGUE DISC

スーパー・アナログ・ディスクについて

●制作意図

すべてアナログ録音のマスター・テープを使用している〈スーパー・アナログ・ディスク〉は、アナログの持つ独自の魅力を可能な限り追求した特別製のハイ・クオリティー・ディスクです。

レコードの主流はコンパクト・ディスクに移り、そのCDにもいくつかの長所があることはご存知の通りです。

しかし、長年にわたり多くのノウ・ハウを蓄積してきたアナログ・ディスク(AD)には、先端技術の産物CDでも得られない、物理特性を越えた音楽の世界が存在していることは既成の事実です。私たちはそのアナログ・オーディオのソフト技術をさらに深く研究・開発し、音を磨きつけております。

〈スーパー・アナログ・ディスク〉は、すでに国内はもとより、広く欧米にも知られるところとなり、高い評価が与えられております。

音楽とオーディオを本当の意味で理解し愛する皆様に聴いていただくことを目標に、〈スーパー・アナログ・ディスク〉は制作されております。

●〈スーパー・アナログ・ディスク〉のどこがすぐれているか

①周波数帯域：このために使われたカッティング・システムは10Hzから50kHzの非常に広い帯域をもってあります。したがって、ここに選ばれたマスター・テープの持つ帯域は最大限に取められています。

その充実した重低音から、豊かな倍音を含む超高域までが再現されております。

②トランジェント特性：音の明快な立上りからは、瞬発力とスピード感のある迫力が得られ、また卓越した解像度が生み出されています。

③ダイナミック・レンジ：技術的にはノイズ・レベルから最大レベルまでの広さを指しますが、ここでは音楽上のピアノからフォルティシモまでの聴感上のエネルギー感(ダイナミクス)の幅の広さをより大切にしました。たとえばフォルティシモではアナログ独特の緊張度の高い音量感が聴かれます。

④低歪率：清澄な透明感と混濁のない音質は、解像度をよくし、いくらボリュームを上げて再生しても決して耳ざわりな音にはならないはず。

⑤情報密度：アナログ独特のなめらかな音質により、楽器や声のもつキメ細かい粒子や肌ざわりが得られ、AD本来の人間性に基いた持味を十分に再現しております。そこから

導かれる演奏家の微妙な表情の変化や音楽に求める深い感動は、ハード優先の“オーディオ的快感”とは本質的に異なるものです。

●〈スーパー・アナログ・ディスク〉の制作工程

①ダイレクト・コネクティング：再生用テープレコーダーのヘッド・アンプから、カッティング用のパワー・アンプまでをダイレクトに接続し、その間のたとえばグラフィック・イクオリザー、フィルター、リミッターなどは一切介在させておりません(ブロック図参照)。その結果、マスター・テープの信号をフラットにカッター・ヘッドへ伝送することができ、音質劣化やトランジェント特性は著しく改善され、ナチュラルで鮮度の高い音が得られております。

そのため、テープに含まれている多少のヒスやハム・ノイズ、暗騒音(特に重低音)、指揮者の足音などもそのまま記録されていることを予めおことわりしておきます(これは周波数帯域が広いためであり、また技術的にも一切修正していないからです)。

②ハーフ・スピード・カッティング：テープとカッティングの速度をそれぞれ $\frac{1}{2}$ に落としてゆっくり切込むことによって、音溝の精密度を高め、広大な周波数帯域によって情報量を最大に収録しています。

この技術は高度の熟練を要し、特に〈スー

パー・アナログ・ディスク〉では溝の幅も最大280から最小30ミクロンと広く深くカッティングされており、(通常は80~30ミクロン)、マキシマム・レベルがいかに高いかを証明しております。

③管球式アンプ：ハイ・パワー(実効出力、300W+300W)のカッティング・アンプと、ヘッド・アンプはすべて当社の技術陣が開発した特別製の管球式を採用しています。これにより、余裕のある容量と、アナログ・サウンドの豊かで温かな音楽性を十二分に伝えております。

④超多重量盤：約180grの重さをもってあります。これは通常レコードと比べてさらに60%以上の重さとなります。それによって、前述した深い音溝にも対応できるとともに、レコード演奏時の盤の共振を大幅に減少させます。特に大きな音量レベルのときや低音域を安定させるために大変効果があります。

⑤高品質材料：極めて慎重なメッキ工程による金属原盤の製造と相まって、厳選されたプレス原料と特殊な原料加工技術によって、ラッカー・マスターに収録された情報に非常に近い音質が得られ、SN比も改善されております。

このように〔スーパー・アナログ・ディスク〕は、通常のADとは別の製造ラインによる一種の「手作り」のレコードであります。

●再生上のご注意

①カートリッジとプレーヤー・システム：針先の摩耗やホコリの附着には特にご注意ください。できればレコード片面ごとに針先のクリーニングをおすすめします。

また、針圧は適性針圧が少し重くして下さい。

②盤面のホコリ：音溝が深いため、溝の底にホコリが入り込まないように方法で除去して下さい。かえってノイズが増えることがあります。

③アンプ：前におことわりしましたように、ヒスや低域等のノイズは、コントロール・アンプにおいて調整して下さい。また、メイン・アンプは出力の大きい余裕のあるものほどダイナミックな効果が発揮されます。

× × ×

ハイ・エンド・ユーザーを始め、ある程度のグレードの再生装置をお持ちのレコード・ファンの中に、CDの再生を体験された上でもなお、ADの音の魅力を再認識される傾向がみられます。そうした皆様に、アナログのすぐれたプログラム・ソースとしてこの〈スーパー・アナログ・ディスク〉を十二分にお楽しみいただけることを念願する次第です。

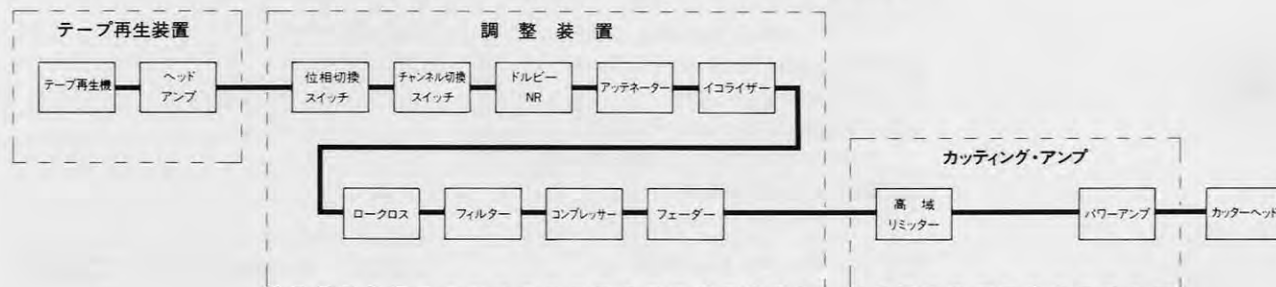
〔'90.7 高和元彦〕

ダイレクト・コネクティングのブロック図

〈スーパー・アナログ・ディスク用カッティング・システム〉



〈ノイマン VMS カッティング・システム〉(通常の例)



〈スーパー・アナログ・ディスク〉
キングレコード制作スタッフ
プロデューサー:高和元彦
A&R:福田 稔
マスタリング・エンジニア:牧野 晃
アシスタント・エンジニア:
青木輝彦、西田尚雄
ディスク製造:日本ビクター株式会社